

国際移民送金と経済依存

—メキシコ農村に及ぼす移民送金の効果をめぐって—

浅 野 義

I. はじめに

国境を越える移民労働を通じて開発途上国の移民送り出し地域が先進国の労働市場と密接に連結するようになるにつれて、国際移民が送り出し地域の経済にどのような影響を及ぼすのかは重要な研究テーマになってきている。なかでも、最も注目されてきたもののひとつが移民送金の問題である。移民労働者が受け入れ国で得た所得は多くの場合そのかなりの部分が送金という形で送り出し国へ移転される。争点となってきたのは、その送金によって送り出し地域は経済発展するのか、それとも受け入れ国に経済的に依存することになるのかどうかについてである。

その具体的な事例としてこれまで多くの研究がなされてきたのがアメリカで働いているメキシコ人移民労働者による送り出し地域への送金の効果をめぐる問題である。それによれば、1980年代にはアメリカからの移民送金がメキシコの送り出し地域に及ぼす影響について悲観的な見解が支配的であった。すなわち、メキシコ人移民労働者による送金は移民を送り出した家族の生活水準を向上させるものの、送り出し地域には経済成長をもたらさず、かえってアメリカへの経済的な依存を強めることになるというのが通説になっていた。移民研究者のなかには、このような移民労働のアメリカへの経済的依存を一種の社会病理とみなし、「移民症候群 (migrant syndrome)」とか「移民の文化 (culture of out-migration)」と呼んでいる人たちもいる。

このような従来からの悲観的な見方とは対照的に、1990年代になって、メキシコ人移民労働者の送金が送り出し地域の経済に与える波及効果に注目し、地域の経済発展に果たす送金の役割を積極的に評価しようとする研究が出てきた。移民送金はアメリカに移民を送り出している家計に直接的なインパクトを与えるばかりではなく、乗数プロセスを通じて、移民を送り出していない家計さらには送り出し地域全体にも波及効果をもたらし、その経済発展に寄与することから、送り出し地域に「移民症候群」が存在するとはかぎらないと考えられるようになった。さらに近年では、送金額がますます増加するなかで、アメリカにおけるメキシコ系住民の支援組織であるHTAs (hometown associations) を通じた寄付金の送金とその出身地の開発ツールとして注目されるなど、楽観論が支配的となりつつある。

このように、メキシコ人移民労働者の送金によって送り出し地域が経済発展するかどうかをめぐる議論は悲観論から楽観論へと移りつつあるが、移民送金が送り出し地域の発展を自動的にもたらすとはかぎらず、アメリカへの経済依存を強める可能性も否定できないであろう。「移民症候群」が依然として存在するという見方が消え去ったわけではない。し

かし、「移民症候群」とか「移民の文化」といわれる場合、それが経済学的にみてどのような状況を指しているのかはかならずしも明らかではなく、その経済的なメカニズムの意義を明らかにすることの重要性は今日でも失われていないと考える。

そこで本稿では、伝統的な移民送り出し地域であるメキシコ農村を対象として1990年代になされた国際移民送金と経済発展の研究をあらためて振り返ることで、「移民症候群」と指摘する人たちがどのような分析枠組みに基づいて、そしてどのようなケースを想定しているのかを明らかにする。以下では、まず、「移民症候群」とはどういう現象を指すのかを考察し、次に、移民送金の乗数効果を考える。さらに、農村モデルとそのシミュレーション結果から「移民症候群」といわれる現象がどのようなケースを想定しているのかを検討する。

Ⅱ. ミグラダラーと移民症候群

アメリカで働いているメキシコ人移民労働者によってメキシコに送られるないしは持ち込まれる米ドルはミグラダラー (migradollars) とも呼ばれている。メキシコにおけるアメリカへの移民の送り出し地域はハリスコ、ミチュアカン等の西部諸州の農村に集中し、これらの農村では経済活動人口に占める移民の割合が高く、しかも送金が農家所得の重要な源泉となっている。このため、ミグラダラーの効果に関する分析は、移民を送り出している農家がミグラダラーをどんな用途に使っているかに焦点が当てられてきた。

移民送り出し農家の支出パターンに関する多くの調査結果によれば、ミグラダラーの大部分は消費に向けられ、生産的な投資に回される資金はほとんど残されていなかった。このため、移民送金は地域発展の刺激剤としては働かなかったとみなされた。すなわち、送金は個々の家計の貧困を一時的に緩和させるものの、生産を刺激し新しい雇用機会を創出するような経済的な自立性を可能にさせる構造転換を送り出し社会にもたらすことができなかったと結論づけられてきたのである。

移民を送り出している家計はミグラダラーによって生活水準を上昇させることができたが、これは移民を継続的に送り出すことを通じてはじめて可能であったのである。この結果、多くの人々が移民に駆り立てられ、その生活の源泉をますますアメリカでの賃金労働に依存するようになった。このようなアメリカへの所得依存は送り出し地域の人々のライフスタイルにまで影響を及ぼし、アメリカでの労働は繁栄と成功のカギとなるが、その地域にとどまるのは貧困と失敗にほかならず、そこは帰ってくる場所ではあってもより良い生活を獲得する場所ではないとみなされるまでになった。このような移民労働現象をライカート (1994) は「移民症候群」と呼んだのである。

しかしながら、移民送り出し家計の支出行動に関する研究のなかには、ミグラダラーの一部が生産的な投資に当てられ、送り出し地域への経済的なインパクトが生じることを報告している例もみられる。マッセイら (1994) は、ハリスコ州、グアナファト州、ミチュアカン州、ナヤリ州に所在する22のコミュニティにおいてミグラダラーが消費と生産にどのような割合で支出されたかの推計している。それによれば、ミグラダラーの65%は家族維持 (食料・衣料・医療等) や住宅などの消費に向けられたが、生産にも6.5%が支出

されている。そのなかではビジネス目的の投資の割合が高く、全体の4.2%、100万ドル以上になっている。

さらに、このような生産への直接的なインパクトに加えて、送り出し地域には消費支出と生産支出の波及効果が生じる可能性がある。したがって、移民症候群がすべての送り出し地域で当てはまるとはかぎらないことが考えられる。

Ⅲ. ミグラダラーの乗数効果

ミグラダラーは、移民を送り出している家計の予算制約を緩和させることによって、アメリカへの移民労働がなければ購入の難しい財・サービスに対する需要を生み出す。この需要増加に対応して、メキシコの生産者は新規に労働者を雇用したり投入財を購入してその生産を増加させる。この結果、移民を送り出している家計ばかりではなく、送り出していない家計にも所得が発生し、新たな需要が生じる。これに伴って、生産もさらに増加する。このような波及プロセスを経て、送り出し地域では所得と生産の増加が発生する。これがミグラダラーの乗数効果といわれるものである。

ミグラダラーの流入とその乗数効果によって、送り出し地域には高水準の雇用、所得、投資が生じると予想されるので、ミグラダラーはその地域に経済停滞をもたらすよりもむしろ経済発展の重要な刺激剤として働いているとみなされる。このような乗数効果を重視する立場からは、移民労働の経済的な効果に対する従来からの見解はあまりに悲観的すぎると考えられている。

ドゥランら（1996）は、メキシコ人移民労働者の送金がメキシコの伝統的な移民送り出し地域であるミチョアカン州の3つの農村に及ぼす効果をSAM（Social Accounting Matrix：社会会計行列）から導出した乗数に基づいて推計している。それによれば、これらの農村のひとつであるLa Yerbabuenaは人口が2,240人で、労働者の77%は農業に従事している村落であるが、1990年にはこの農村からの移民によって499,000ドルが送金された。この送金によってこの農村では388,000ドルの所得が派生し、所得が887,000ドル増加した結果、この農村の所得の51%はアメリカへの移民によって直接・間接に生じたと推計されている。また、生産と投資についてもかなりの増加が生じたと推計されている。他の2つの農村についても同様な結果が得られたことから、ライカートの結論は妥当しいという報告がなされている。

しかしながら、ミグラダラーがメキシコ農村の経済に及ぼすこのような乗数効果を考えるにあたっては、この農村の市場が農村外の市場とどの程度統合されているかが重要である。生産物によってはミグラダラーは必ずしもこの農村の生産量を増加させるとはかぎらないからである。たとえば、ミグラダラーが食料や衣料など家計の基礎的な品目に支出された場合、もしこれらの品目がこの農村の内部で生産されるならば、乗数効果は大きくなるが、農村外から移入されるならば、その効果は小さくなる。ドゥランら（1996）も指摘しているように、もしミグラダラーが送り出し農村に流入してくるものの、この農村から流出し都市部の労働者や資本家のポケットに入るならば、ライカートの主張は当てはまるかもしれない。

また、この農村に移民送り出し農家が多数存在し、農家所得の源泉として農業労働と移民労働とが競合関係にある場合には、移民労働の増加によって農業の生産量は減少する可能性がある。さらに、供給が完全には弾力的ではないならば、ミグラダラーによって需要が増加してもその一部が財・サービス価格の上昇によって吸収され、生産量があまり増加しないことも考えられる。

したがって、SAM乗数による分析では、農村市場は農村外市場と統合されているかどうか、農業労働と移民労働の競合関係あるかどうか、供給は弾力的かどうかなどが考慮されていないことから、ミグラダラーの経済効果を過大に見積もる可能性があるといえる。

IV. 農村 - CGEモデル

ミグラダラーがメキシコの移民送り出し農村に及ぼす経済的な効果をみるにあたっては、農村経済を一般均衡的な枠組みで考えることが必要である。このような試みのひとつがテラー（1995）の農村 - CGEモデル（Computable General Equilibrium Model、計算可能な一般均衡モデル）である。

テラーは新古典派の農家モデル（Neoclassical Household Farm Model）を修正し、これをCGEの枠組みに組み入れ、さらに農村市場と農村外市場との統合に関する3つの異なった仮定から3つの農村 - CGEモデル（モデル1、モデル2、モデル3）を構築してそれぞれについてのシミュレーション分析を行っているが、以下では、新古典派の農家モデルとそれを修正した3つの農村モデルについてそれぞれの基本的な特徴をみてみよう。

標準的な新古典派農家モデルでは、農家はその家族労働を農村内の生産活動や農村外の活動（移民）に配分し、その効用を極大化するようにその労働時間を余暇時間との関係で決定すると想定されている。このモデルではまた、農村の市場は農村外の市場と完全に統合されていると仮定されている。すなわち、生産物の価格と投入労働の価格はすべてこの農村の外部の市場で決定され、この農村経済にとっては与件とされる。ほとんどの生産物は一定の価格でこの農村にとって「移出」や「移入」が可能であり、雇用労働も一定賃金で農村外から利用可能であると想定されているのである。さらに、この農村では土地と資本は少なくとも短期的にはそれぞれの生産活動において固定されている。

テラーはこの標準的な農家モデルに家族労働と雇用労働との代替の不完全性という制約が課されたケースを考え、これを基本モデル（モデル1）とする。すなわち、この基本モデルでは、家族労働は農家の生産活動において雇用労働とは完全には代替財ではないと仮定される。この場合、農家はその構成員の時間を農村のいくつかの生産活動や農村外の労働活動（移民）に配分したり、余暇に充てたりすることで効用の極大化を図ろうとするが、もし移民労働や余暇の増加が生じるならば、この農村の生産活動は基礎穀物等の労働集約的な生産から牧畜等の資本集約的な生産へシフトするであろう。

この基本モデルを修正したのがモデル2とモデル3である。これらの修正モデルでは、ある特定の市場について、農村内では市場交換が行われているが、農村市場と農村外市場との取引はそのコストが過大となっているために行われていないと想定されている。

モデル2は基本モデルに労働制約が課され、賃金労働が農村外から入手可能でなくなる

ケースである。農村内の雇用労働の需給によって農村の賃金が決定される。たとえば、雇用労働に対する需要が増加すれば、農村の賃金が上昇する。そして、このような賃金上昇は農村における生産や消費に影響を及ぼすであろう。

モデル3は農村に労働制約が課されていることに加えて、農村の主要作物が高い取引コストのために農村外の市場と取引できない「農村非移出入財 (village nontradables)」になっているケースである。この場合には、生産者はその主要作物を農村外に販売できず、また消費者はそれを農村外から購入しえないことから、農村内における需給によって主要作物の価格は決定される。このことは、農村が主要作物に関して自給自足になっていることを意味している。

V. 農村モデルのシミュレーション結果と移民症候群

以下では、SAM乗数モデル、新古典派農家モデルおよび農村 - CGEモデル（モデル1、2、3）のそれぞれについてテラーが行ったシミュレーション結果を示し、さらに、この結果から移民症候群といわれる現象がどのモデルを想定して考えられているのかを検討してみよう。

このシミュレーションによれば、それぞれのモデルにおいてミグラダラーが10%増加した場合の効果を示されている。ミグラダラーが増加する要因としては、受け入れ国の労働市場における雇用増加や賃金上昇、為替レート（ペソの対ドルレート）の減価（切り下げ）などが考えられる。

SAM乗数モデルでは、ミグラダラーの増加に伴って移民送り出し農家は財・サービスに対する需要を増加させるが、この需要増加は、供給が完全に弾力的であることから、これに等しい生産の増加をもたらす、さらに乗数プロセスを経てこの農村全体の生産を増加させる。基礎穀物では2.2%、その他の部門では1.3%から2.8%、農村全体では1.8%生産の増加が生じている。所得は3.7%、農村外からの移入部門である小売は3.6%増加している。このモデルでは、移民は外生変数であるのでミグラダラーの増加によって移民がどれだけ生じたのかは確かめられない。

新古典派農家モデルでは、この農村の生産はミグラダラーの増加によって影響を受けない。農家はその構成員の時間をアメリカへの移民労働により多く配分し19%の移民増加が生じているけれども、家族労働と雇用労働とは完全な代替財であるので、その生産活動において家族労働は雇用労働で代替されるためこの農村の生産は変化しない。家族労働の付加価値は37%減少し雇用労働のそれは440%増加している。ミグラダラーの増加はまた移民送り出し農家の所得を増加させ、雇用労働を移民農家に供給している家計の所得も増加させる結果、この農村全体では7.4%増大している。しかしながら、所得増加はこの農村の生産を刺激する代わりに農村外の生産物に対する需要を増加させるので、小売の生産は8%増加している。

農村 - CGEモデルでは、ミグラダラーの増加によってこの農村全体の生産は減少している。これは農村内の生産活動と移民とが競合するからである。基礎穀物については、モデル1では1.7%、モデル2では1.3%それぞれ生産が減少しているが、モデル3では基礎穀

物を農村外から移入しえないためその価格が1.8%上昇しその生産は0.2%増加している。牧畜の生産は増加しているが、これはその生産が資本集約的で労働はほとんど使用されていないからである。移民への効果については、モデル1では7.2%、モデル2では6.8%、モデル3では6.5%それぞれ増加しているが、家族労働と雇用労働が完全には代替可能ではないため新古典派農家モデルに比べて大きくはない。また、農村の所得も増加するが、新古典派農家モデルほど大きくはない。

このシミュレーション結果から「移民症候群」がどのようなモデルを想定しているのかを考えてみよう。

移民症候群をミグラダラー増加による移民農家や送り出し地域の生活水準の上昇と消費の増加（財・サービスの移入部門である小売の生産増加で表される）と考えるならば、上記のモデルはその程度に差はあるもののいずれも当てはまる。また、移民の増加とみなすならば、SAM乗数モデルを除いて他のどのモデルも妥当する。特に、新古典派農家モデルについては、所得、消費、移民のいずれに関してもミグラダラーの増加によって最も大きな影響を受けている。したがって、移民症候群をミグラダラーの増加によって所得と消費が増加し移民農家が農村の生産を雇用労働で代替してその構成員を移民労働に振り向ける現象と考える人たちは、新古典派農家モデルを基本的な分析枠組みとしているとみなすことができよう。

小売を除く生産と付加価値への効果については、モデルによって大きな違いがみられる。SAM乗数モデルでは生産と付加価値はプラスになっているのに対して、新古典派農家モデルでは生産部門への影響は生じず、家族労働の付加価値はマイナス、雇用労働のそれはプラスになっている。一方、農村・CGEモデルにおいては、牧畜部門とモデル3の基礎穀物部門を除いて生産への効果はマイナス、付加価値への効果はモデル1、2、3ともマイナスになっている。

ミグラダラーの増加による生産への影響を考慮すると、SAM乗数モデルをミグラダラーの効果を考えるときの分析枠組みにしている人たちにとっては、移民症候群は存在しないか、たとえ存在するとしても所得と消費の増加というかなり限定された意味でそれを考えていることになるであろう。一方、農村・CGEモデルに基づいてミグラダラーの効果を分析しようとする人たちにとっては、ミグラダラーの増加によって所得、消費、移民が増加し、それに伴って農村の生産が低下する現象を移民症候群とみなすかもしれないし、あるいは、アメリカへの移民労働の増加による農村の生産減少効果を指して「オランダ病（Dutch disease）」と呼ぶかもしれない。ただし、生産への効果、特に基礎穀物の生産の増減と牧畜の生産の増加をどのように考えるのかで、また、分析の対象となる農村の市場が農村外の市場とどの程度統合されているかでその判断が分かれるであろう。

VI. おわりに

移民を送り出している開発途上国が先進国の経済に依存しているのかどうかをめぐる論議において、「移民症候群」という用語はきわめて大きな影響力を持ってきた。特に、移民労働現象の代表的な事例ともいえるアメリカへのメキシコ人移民労働に関して、それを

特徴付けるものとして「移民症候群」という用語がたびたび用いられ、メキシコの移民送り出し地域に普遍的に当てはまるようなイメージが植え付けられてきた。しかし、この用語を使っている人たちがどのような地域経済を思い描いているのか、またどのような分析枠組みで考えているのかはかならずしも明らかではない。

メキシコ人移民労働者の送金が送り出し地域に及ぼす影響を分析するにあたっては、「移民症候群」とはどのような現象を指しているのか、それをどのような経済的枠組みで考えているのかを明示することが必要であろう。本稿では農村モデルとそのシミュレーション結果の検討を通じてその必要性を明らかにしようと試みてきた。

「移民症候群」といわれる移民労働現象を経済的な枠組みで理解することは、送り出し地域の開発計画を立てていく上でも欠かせない。移民送金を梃子として送り出し地域の発展を目指す政策を採用するにしろ、その地域の自立的な発展の可能性を探り、移民労働に代わるオールタナティブな地域政策を立案するにしろ、その地域の移民送り出し要因と経済構造を把握することなしには開発政策は効果をもたらさないであろう。

参考文献

- ・ Adelman, Irma and J.E.Taylor(1988), "Life in a Mexican Village: A SAM Perspective", *Journal of Development Studies*, 25.pp.5-24.
- ・ De Haas, Hein(2007), *Remittances, Migration and Social Development: A Conceptual Review of the Literature*, Social Policy and Development Programme Paper No.34. United Nations Research Institute for Social Development.
- ・ Durand, J.,E.A.Parrad and D.S.Massey(1996), "Migradollars and Development: A Reconsideration of the Mexican Case", *International Migration Review*, 30.pp.423-444.
- ・ Lozano Ascencio, Fernando(1993). *Bringing It Back Home: Remittances to Mexico from Migrant Workers in the United States*. Monograph Series, no.37. La Jolla, Calif.: Center for U.S.-Mexican Studies, University of California, San Diego.
- ・ Massey, D.S. and E.Parrado(1994), "Migradollars: The Remittances and Savings of Mexican Migrants to the USA", *Population Research and Policy Review*, 13.pp.3-30.
- ・ Reichert, Joshua S.(1994), "The Migrant Syndrome: Seasonal U.S. Wage Labor and Rural Development in Central Mexico", *Human Organization*, 40.pp.56-66.
- ・ Taylor, J.E.(1995), *Micro Economy-Wide Models for Migration and Policy Analysis : An Application to Rural Mexico*, OECD, Paris.
- ・ Taylor, J.E.(1996), "International Migration and Economic Development: A Micro Economy-Wide Analysis", in J.E.Taylor ed., *Development Strategy, Employment and Migration: Insights from Models*, OECD, Paris.pp.87-104.
- ・ Taylor, J.E. and I.Adelman(1996), *Village Economies : The Design, Estimation and Use of Village-Wide Economic Models*, Cambridge University Press, UK and New York.
- ・ Zárate-Hoyos, Germán A.(2005), "The Development Impact of Migrant Remittances in Mexico", in Donald F. Terry and Steven R. Wilson eds., *Beyond Small Change— Making Migrant Remittances Count—*, Inter-American Development Bank. pp. 159-191.

International Migrant Remittances and Economic Dependence in Rural Mexico

Tadashi Asano

In the 1980s, Mexico-U.S. migration was widely thought to discourage autonomous economic growth in traditional migrant-sending villages of Central Mexico and to promote economic dependency. This pessimistic view is typically based on migrant remittances—migradollars—overwhelmingly being spent on non-productive ends. Reichert called Mexico-U.S. migration the “migrant syndrome”.

However, Reichert failed to account for multiplier effects of consumer spending. The basis of his analytical framework for the migrant syndrome is not necessarily obvious.

In order to identify theoretical and economic characteristics of the migrant syndrome in rural Mexico, this paper compares Taylor’s policy simulation results from the village CGE (Computable General Equilibrium) model, the village SAM (Social Accounting Matrix) multipliers model and the neoclassical household farm model. From this comparison, supposing that the migrant syndrome view will be based on the neoclassical household farm model seems reasonable.